

音楽を伴ったお手玉遊びによる 幼児と高齢者の交流プログラムの試行と課題

高木夏奈子^[1], 中野 聡子^[2], 實川 慎子^[1]

[1] 植草学園大学発達教育学部, [2] 常葉大学健康科学部

少子・超高齢化社会における地域活性化の一助となることを企図し、音楽を伴ったお手玉遊びによる幼児と高齢者の交流プログラムを試行した。実施後に保育者及び高齢者の会のサポーター各2名を対象とした半構造化インタビューを行い、Steps for Coding and Theorization (SCAT)を用いて分析した結果、次の点から本プログラムの有効性が示唆された。①幼児と高齢者の協同活動によって、両者とも自己肯定感が高まった。②お手玉遊びは他者とのふれあいを促し、参加者の発達や身体状況に適した難易度の活動を設定しやすい。③音楽・歌を伴うことで楽しさが高まり、拍・リズムに合わせることで協同活動がしやすくなる。

今後、交流プログラムとして実施する際には、①参加者に適した活動の設定が重要であり②お手玉に慣れるための予備的な活動を行っておくことが望ましい。また、活動後も子どもがお手玉で遊ぶためには、お手玉の安全・衛生管理への留意と、お手玉製作に関わる支援が必要である。

キーワード：お手玉遊び 音楽 幼児 高齢者 交流プログラム

1. はじめに

1.1 本論の目的

本研究は、2017年度に着手された、植草学園大学研究ブランディング事業「少子・超高齢化社会における活力あるコミュニティの形成研究—保育・教育・保健医療との有機的な繋がりを軸として」の一部として着想された。

少子・超高齢化社会における地域コミュニティ活性化の方策の一つとして、筆者らは世代間の交流、特に幼児と高齢者の交流に着目した。

幼稚園教育要領・保育所保育指針等の領域「人間関係」では「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。」¹⁾と示されており、保育において世代間交流はニーズのある活動である。

また、高齢者にとっても、地域の幼児との交流活動によって、生命力あふれる子どもと接することは、よい刺激になると期待される。

上村ら(2007)は次のように述べている²⁾。「わ

が国では、1994年の『21世紀福祉ビジョン』において、世代間交流の必要性が強調されて以降、子どもと高齢者の世代間交流の取り組みが盛んに行われてきた。」「幼児にとって高齢者と関わることは、非常に肯定的に受け止められており、高齢者との日常的な交流は、他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与していることが示唆された。また、高齢者にとっても幼児との交流は楽しみとなっていることが観察より明らかとなった。」

このように、幼児と高齢者の交流は双方にとって有益であり、交流事業のさらなる推進が期待される場所であるが、子どもの年齢によっても、高齢者の年齢によっても、その活動内容は様々である。

CiNiiで「幼児 高齢者 世代間交流」で検索すると17件ヒットした(2019年8月16日閲覧)。幼稚園・保育所における世代間交流は、「日常的な交流」というよりは、年1,2回の行事として実施されていることが多く、一般に交流の形態としては「幼児たちの歌や遊戯等を高齢者が鑑賞する」形態が最も多い³⁾。高齢者の年齢が比較的若い場合には、高齢

者による育児支援をテーマにしたものも報告されている⁴⁾。いずれも、それぞれの施設・保育所等の状況に適した活動を実施しており、幼児と高齢者の交流活動内容をプログラムとして一般化し、開発を企図した例は管見ではみられなかった。

本研究では、地域コミュニティの活性化の一助となりうる幼児と高齢者の交流活動プログラムの開発を企図し、音楽を伴うお手玉遊びによる活動を試行した。事後に実施した保育者と高齢者の会のサポーターを対象とした半構造化インタビューにより、本試行プログラムの有効性と今後の実施における課題等の検討を行う。

1.2 音楽を伴ったお手玉遊びに着目した理由

本研究では、高齢者と幼児がともに楽しめる活動としてお手玉遊びに着目した。

お手玉は、「古くから人から人へと伝えられてきた遊び」である「伝承遊び」⁵⁾の一つである。その特徴を、日本のお手玉の会(2016)及び森下ら(2005)から要約・引用する。

・お手玉に類した遊びの歴史は数千年前に遡るとされる。日本には奈良時代に伝来したとされ、奈良・平安時代は小石などを用いていたが、江戸時代に布製のお手玉が使われるようになった⁶⁾。

・お手玉に用いられている布の色合いを楽しめることに加え、操作する際に布及び内容物(小豆等)の感触やその音色も楽しむことができる⁷⁾。

・お手玉の操作は、手(主には指、手のひら)を主に用いる。指先を握ったり開いたりする手指の運動機能の向上に加え、「目と手の協応動作、感覚と運動の協調心理を培い、全身の運動能力を高めるのにも大変役に立つ運動(遊び)」⁸⁾である。

上記を整理すると、幼児と高齢者がお手玉遊びをすることによる利点は2つである。

① 手指の運動機能の発達・維持に有益である。

お手玉の操作で手指を用いるため、子どもの手指の運動機能の発達に、高齢者にとっては機能維持に有益である。複数のお手玉をジャグリングのように投げ上げる「ゆり玉」は幼児には難しい技だが、お手玉の普及活動に取り組んでいる「日本のお手玉の会」では、ヨーヨーお手玉による演舞など、新しいタイプの遊び方も発信している。また近年では高齢

者の介護予防にも活用されている⁹⁾。

② 伝承遊びの一つである。

伝承遊びは素朴で誰にとっても親しみやすく、高齢者にとっては自身の幼少期を想起させる懐かしい遊びであり、次代に伝えていきたい子ども文化である。

幼稚園教育要領・保育所保育指針等の領域「環境」には以下の記述がある¹⁰⁾。

2 内容(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

3 内容の取扱い(4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、[以下略]

「我が国の伝統的な遊び」として想定されているのが「伝承遊び」と称されるものであろう。

上記①②に加えて、本論で特に音楽を伴った活動を設定したのは、人が交流する際に音楽は大きな力を発揮するからである。各種行事で式歌や音楽が用いられていることから明らかのように、音楽は場に適した雰囲気形成し、共に歌いリズムを共有することにより一体感を醸成する。他の伝承遊びの「こま」「あやとり」「おはじき」等と異なり、「お手玉」の「寄せ玉」は昔から歌を伴って遊ばれてきた。わらべうたなど親しみのある雰囲気を作り出す音楽を伴ったお手玉遊びが交流に効果的であるという仮説の元に音楽を伴ったお手玉遊びの活動を設定した。

2. 方法

2.1 対象

試行プログラムを千葉市で活動する高齢者の会「おひさまの会」(仮称)と近隣のY保育所との交流会で2018年12月に実施した。

(1) 「おひさまの会」と近隣保育所との交流会について

千葉市若葉区で活動する「おひさまの会」は、支援の必要な高齢者(主に後期高齢者)を、地域の元気高齢者(70歳代前半から後期高齢者も含む)がサポーター役として支える介護予防のための交流会である。活動は毎月2回程度、地区の自治会館で行われ、各回1時間ほど体操やゲーム、音楽活動など

様々な活動と、30分程度の茶話会を行っている。

会の活動計画には、年に一度、近隣のY保育所との交流会も含まれている。当会とY保育所との交流会は10年以上継続しており、毎年、Y保育所に在籍している年長児全員（十数名）が参加し、高齢者は幼児との交流を楽しみにしているということである。2017年度の交流会では、年長児による歌やダンスの披露と共に、高齢者と幼児が共に折り紙でコマを作る活動が行われていた。

本学においては、保健医療学部における地域貢献の一つとして、2010年から教員と学生が年3回、地域の高齢者と学生との交流を目的として、当会に参加してきた。さらに、2017年からはブランディング事業の開始に伴い、保健医療学部、発達教育学部の両学部が共同で当会に参画する機会を得た。会と保育所との交流活動において音楽を伴ったお手玉遊びの活動を行うことを提案し、会の了承を得て2018年12月に実施した。

(2) 交流活動の内容

① 交流会の概要

当該年度の年長児の在籍は17名（うち1名は当日欠席）で、主任と担任の2名の保育士が引率し、会の活動場所である自治会館に徒歩で来館した。会の当日の参加は、高齢者が15名、サポーターが10名弱だった。例年通り、60分の活動時間の前半は、子どもの自己紹介ののち歌とダンスが披露され、後半は会の企画としてお手玉を用いた活動を行った。その後30分のおやつタイムをとり、会からコマとメダル、筆者からお手玉をお土産とし、徒歩で帰所する子どもたちを見送った。

② お手玉による活動

事前に保育所と打ち合わせの上、次の活動を行った。活動時間は約30分である。

A. お手玉の中身をあてクイズ

当日、会のサポーターの厚意で、枝についた状態の数珠玉と、数珠玉を入れたお手玉が用意されており、数珠玉を見ながらその手ざわりを確認することを導入として行った。

小豆・トウモロコシ・しじみ・ペレット（プラスチック製ビーズ）を入れた4種類のお手玉を準備し、4種類の内容物を入れた小さい透明の密閉袋とともに提示した。3グループに分かれた幼児は、密閉袋

とお手玉を手で触り、お手玉の中身をグループで相談しながら考えた。1グループのみ、小豆とトウモロコシを間違えたが、「平べったいほうがトウモロコシ」という言葉がけで、触って確認し納得する姿が見られた。

B. ウオーミングアップ

幼児・高齢者共にお手玉を手を持ち、《うさぎとかめ》（石原和三郎作詞、納所弁次郎作曲）の歌に合わせ、まっすぐ上に投げ上げて落ちてくるお手玉を手の平で受ける手技を行った。高齢者は「利き手で→利き手でない手で→両手同時に」の動作を各自のできる範囲で行った。

お手玉を上に向けて上げる動作では、天井にぶつかるほど投げ上げる男児がいたり、「できない」と尻込みする女児の姿が見られたりしたが、「ちょっと手から離すだけで大丈夫」という声かけで手技に取り組むことができた。年長児には、一つのお手玉を安定して投げ上げ、受け取ることはまだ難しい様子だった。幼児は歌に合わせて手技を行うまでにはいならず、それぞれのペースで投げ上げることを楽しんだ。

C. 高齢者による手技披露

お手玉を投げ上げて、手の甲で受ける（それををはね上げて、今度は手のひらで受ける）動作を全員で数回行った。投げ上げて手の甲で受ける動作も年長児には難しかったので、高齢者による手技を幼児たちが応援する形をとった。ア：ちょっつきり（投げ上げて手の甲で受け、はね上げて上からつかむ）イ：二つゆり（お手玉二つを、一つずつ同じ手で投げ上げもう一方の手で受けて持ち替える動作を連続して行う）ウ：三つゆり（前述の動作をお手玉三つで行う）の手技を、各々の高齢者にできる範囲で披露して貰った。三つゆりが披露された際には、全員から感嘆の声が上がった。

D. お手玉を使った遊び

(ア) 手ぬぐいを用いた《なべなべそこぬけ》

遊び方は次の通りである。高齢者と幼児で2人組を作り、向かい合って手ぬぐいの長い方の両端をもつ。手ぬぐいにお手玉（一つまたは二つ）をのせる。ハンモックを揺らすように、《なべなべそこぬけ》（わらべうた）の歌に合わせてゆらし、息を合わせてお手玉をのせたまま手ぬぐいを回転させて（キャン

ディーが包まれているように) 巻き込む。もう一度歌いながら揺らして、息を合わせて回転させて元に戻す。

Y 保育所では、日頃からわらべうたで遊ぶことが多く、《なべなべそこぬけ》の経験もあるということだった。最初は、力の加減が難しく、手ぬぐいを回転させる際にお手玉が飛んでしまったりしていたが、高齢者のリードによって息を合わせ、歌声と共に、幼児の「できた!」と言う声が聞こえ、繰り返す楽しむ姿が見られた。

(イ) お手玉回し

全員で円形に座り、一人一つお手玉を持ち、歌に合わせてお手玉を隣の人に渡す。

お手玉回しでは、各自お手玉を一つずつ右手で持ち、「1, 2, 3」は左の手のひらにお手玉を打って拍子を取り、「4」で右隣の人の左の手のひらに渡す練習から行った。「おひさまの会」では、昨年から著者らが活動に参加する際に少しずつお手玉を用いた活動を行っていたが、年長児にとっては初めての経験であり、一度手にしたお手玉を離すことはなかなか難しかったようである。複数のお手玉が何カ所かたまってしまい、高齢者が歌いながら空手で手のひらを打っている姿が見られた。

全般に、高齢者は幼児に受容的に接し、幼児はのびのびと活動しながら、和やかに楽しく交流することができた。

2.2 分析方法

成果を評価・分析するために、事後に「おひさまの会」のサポーター2名と引率保育士各2名を対象として半構造化インタビューを実施した。

インタビューは、事前にインタビュー項目を提示の上、概ね各30分程度、引率保育士は12月13日・18日にY保育所で、「おひさまの会」のサポーターは、1月16日に会の活動場所である自治会館で一人ずつ実施した。

インタビュー項目は、①交流活動の有効性②お手玉による交流活動の有効性③お手玉遊びを行うことの有効性④お手玉遊びに音楽が伴うことの有効性⑤効果があると感じた活動⑥お手玉を用いた活動で留意すべき点⑦活動の感想、の7項目である。

インタビューはICレコーダーでの録音及び筆記

で記録し、逐語録を作成した。

分析は、大谷(2019)によるSteps for Coding and Theorization (SCAT)を用いて行った。大谷によれば、SCATは「質的データの分析の困難さという問題を克服するために開発された手法である。」「比較的小さな質的データの分析にも有効であり、「明示的で定式的な手続きを有するため、初学者が着手しやすい分析方法である。」「SCATでは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき語句〈2〉それを言いかえるためのテキスト外の語句〈3〉それを説明するようなテキスト外の概念〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。」¹¹⁾ [改行等に変更を加えた。]

2.3 倫理的配慮

インタビューは本学研究倫理委員会の承認を得、インタビュー協力者には説明書と口頭を以って本研究の意図を周知し、自由意思による研究参加を依頼し同意を得た上で実施した。

3. 結果

3.1 SCATによって得られたストーリーライン

SCATによる保育士Aのワークシートの抜粋を表1に例示する。分析の結果記述された構成概念からなるストーリーラインを、保育士A・Bを表2に、「おひさまの会」サポーター(以下、サポーターと記述)C・Dを表3に示す。表2・表3及び本文中における下線は構成概念を示す。

表1 保育士AのSCATワークシート(抜粋)

質問項目	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外の概念	(4) テーマ・構成概念(前後や文脈を考慮して)
①	帰ってきてからも、お手玉して遊んだりとか。年長さん達、「かわいい」とか言ってもらったことで、自己肯定感というか…感じられたというか。よかったかな、って思います。	お手玉して遊んだり・「かわいい」とか言ってもらった・自己肯定感・よかった	帰園後の自発的なお手玉遊び 肯定的評価による自己肯定感の高まり	遊びの楽しさの継続 世代間交流場面での子どもの自己肯定感の高まり	楽しさによる遊びの継続 子どもの自己肯定感の高まり
①	そうですね。老人ホームみたいなどころに訪問するのが、年間に2,3回あったりとか、あと、保育所の方に、高齢者交流という形で交流するのが、年に2回ぐらいかな、あるので、そんなに多くはないですね。	老人ホーム・年2・3回・高齢者交流・年2回ぐらい	高齢者との年数回の交流活動	継続的な世代間交流	継続的な世代間交流の経験
①	近くに住んでらっしゃって行き来するとか、おじいちゃんおばあちゃんが迎えに来るとか。	近く・行き来・おじいちゃんおばあちゃんが迎えに来る	近隣に住む祖父母との関わり 祖父母による送迎	近隣に居住する祖父母との関わり	祖父母との関わり
①	地域のかた、おじいちゃんおばあちゃんが多いので、散歩してとか、散歩している最中には何人ともすれ違ったりとか。挨拶交わす程度なんですけど。	地域・おじいちゃんおばあちゃんが多い・挨拶交わす	地域の高齢者との挨拶	地域の高齢者との関わり	地域の高齢者との関わり
①	やっぱり反応が返ってくる方の方が、子どもたちにとっては。はい。	反応が返ってくる方の方が・子どもたちにとっては	高齢者の反応によって変化する子どもの関わりがい	対象者の反応によって変化する子どもの関わり	高齢者の反応によって促される子どもの自発的関わり
①	いろいろな人とふれあう中で、他者と自分との距離感であったりとか、保育所ではなく、おうちの人ではなく、お年寄りの方とふれあうことで、思いやりとか、こういうふうにしてあげた方がいいんじゃないか、と自分で思ったりするとか。	いろいろな人とふれあう・他者と自分との距離感・思いやり・自分で思う	高齢者とのふれあいによって生じる思いやりの心	世代交流場面で生じる思いやりの心	思いやりの心
②	面白かった、って言っていました。おじいちゃんおばあちゃんが一緒にこう、手伝ってくれたので、「できた～！」って言って。	面白かった・一緒に・「できた～！」	興味を喚起する活動 高齢者と協力して成功する喜び	子どもの高い興味を生む活動 他者との協力による課題達成の喜び	子どもの高い興味関心を生む遊び 高齢者との協同活動 自己肯定感の高まり
②	あー、はい。でも、けっこう苦手な子とかは、1回もできないけど、でもちょっとどうにかしたらできたっていうのが、みんな味わえたので、距離感的には。	苦手な子・1回もできない・ちょっとどうにかしたらできた・みんな味わえた	活動の難易度 反復による課題の達成	反復すれば可能になる活動の難易度	子どもの挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊び
④	やっぱり、リズムにのってやったほうがやりやすいし、のりやすいし。	リズムにのって・のりやすい・やりやすい	リズムにあわせることによる活動のしやすさ	音楽の拍・リズムに合わせることによる活動の促進	音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさ
④	でも、できなくても、お年寄りの方と間に入って、そういうことができたっていうのは、よかったと思います。	お年寄りの方と・そういうことができた	高齢者との協同活動の経験	高齢者との協同活動	高齢者との協同活動

表2 保育士A・Bのストーリーライン

保育士 A	保育士 B
<p>園児達は、年数回ながら継続的な世代間交流の経験を持っている。高齢住民が多い地域性もあり、祖父母との関わりに加えて、普段の生活での地域の高齢者との関わりもある。「おひさまの会」での高齢者との協同活動では、高齢者の反応によって促される子どもの自発的関わりも見られ、遊びの広がりだけではなく、思いやりの心や、高齢者に受容されることによる自己肯定感の高まりが感じられた。</p> <p>園児達は、通常の保育でも「わらべうた」「あやとり」「おりがみ」「コマ」など、伝承遊びの経験がある。園では子どもの自発的な遊びを促す環境設定をしているが、今回の活動では帰園後にも保育室に置いているお手玉で遊ぶ姿が見られ、楽しさによる遊びの継続が観察された。</p> <p>園では、わらべうたによるリズム遊びをよく行っている。子どもが意欲的に取り組む歌唱活動は、歌による心の解放や、歌による他者とのふれあいも可能である。わらべうたを歌いながらの遊びは、音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさがあり、わらべうた遊びのバリエーションの豊かさで様々な遊び方が可能であり、他者とのふれあいを促す遊びだと思ふ。</p> <p>今回の活動で、最も子どもの高い興味関心を生む遊びだと感じたのは、お手玉に触って中身を当てるグループ活動である。子ども同士の話し合い伝え合う姿が見られた。お手玉は、子どもの発達に応じた遊び方が可能であるため、お手玉遊びのバリエーションを生かして、子どもの挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊びができる。また、お手玉は、手技に用いるだけでなく、食材に見立てておままごとで用いる等、様々な遊び方が可能で、子どもの創造性を促す遊びであると思ふ。</p> <p>お手玉を保育現場で活用するためには、安全性の確保が重要だ。しかし、安全性を確保するための手間はかかる。</p>	<p>「おひさまの会」との交流は、さまざまな人とふれる経験となり子どもの育ちの場になっている。特に、高齢者は子どもに受容的に接してくれるので、子どもの自己肯定感の高まりが感じられる。</p> <p>お手玉に触って中身を当てるグループ活動は、子どもの高い興味関心を生む遊びだった。中身は何か楽しく考えながら、子ども同士の話し合い伝え合う姿が見られた。お手玉遊びは、手技の難易度を調整するなど子どもの発達に応じた遊び方ができるので、子どもの挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊びを設定することが可能である。グループで遊ぶ場面では、遊びにおける子ども同士の関わりを見ることができた。楽しむための適切なグループサイズがあるようだ。お手玉遊びは、幼児から高齢者まで幅広い年代で楽しめる遊び、また一緒に活動することで、子ども同士でも、子どもと高齢者とでも、他者とのふれあいを促す遊びである。</p> <p>歌いながらお手玉で遊んだが、わらべうた遊びは、歌うことによる遊びやすさがある。歌うことによる遊びに集中でき、音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさがある。また、わらべうたの素朴な曲調、例えば、ゆったりしたテンポやリズム、生活に根ざした歌詞などは、大人には懐かしく、子どもには新鮮な経験で楽しめる。</p> <p>世代間交流を通じた玩具提供などによりお手玉を寄贈されることがある。保育においてお手玉遊びをする際には、布が破けて内容物が出てしまう危険もあり、安全性の確保や衛生管理等に留意が必要であるが、保育士がお手玉を作る時間的余裕はないので、お手玉製作に関わる地域からの支援の必要性がある。</p> <p>帰園後には、子ども達がお手玉で遊ぶ姿が見られた。今回の活動で、子どもと共にお手玉遊びの楽しさを充分味わえた。</p>

表3 サポーターC・Dのストーリーライン

サポーターC	サポーターD
<p>「おひさまの会」では、保育所との<u>継続的な世代間交流</u>を行っている。<u>世代間交流の頻度</u>は、年1回が適切である。<u>世代間交流の楽しさ</u>は、<u>子どもと高齢者の相互作用</u>が起こり、<u>生命力あふれる子どもとのふれあい</u>に加え、<u>協同活動による一体感</u>が得られることにある。</p> <p>お手玉遊びは<u>高齢者になじみのある遊び</u>である。高齢者には<u>遊びによって想起される懐かしい思い出</u>がある。例年実施しているコマの製作では、<u>製作する楽しさ</u>に加え、<u>協同して製作する楽しさ</u>が得られる。今回実施した<u>お手玉の遊びやすさ</u>は、<u>お手玉遊びのバリエーション</u>に加え、<u>お手玉を用いた活動のバリエーション</u>が豊かなことにある。子どもが行った<u>お手玉の感触</u>で中身を当てる活動は、<u>高齢者にとっては易しいが子どもの活発な好奇心</u>がみられ、<u>子どもの高い興味関心を生む遊び</u>だった。お手玉の<u>手技は様々な難易度</u>があり、<u>子どもの挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊び</u>が設定でき、<u>子どもの発達に応じた遊び方</u>ができる。<u>練習による技能の上達</u>が見られる一方、<u>高齢者にとっては加齢による技能の低下</u>を自覚せざるを得ない場面もあるが、<u>高齢者の身体状況に適した活動</u>を設定することで、<u>子どもと同様に高齢者の挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊び</u>にすることが可能であり、<u>楽しむためのグループサイズ</u>にも留意することで<u>高齢者の高い興味関心を生む活動</u>になりうる。</p> <p>今回のお手玉遊びは、<u>親しみのある曲種</u>である<u>わらべうたを歌うことによる遊びやすさ</u>があった。<u>音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさ</u>に加えて、<u>楽しさをもたらす曲調の効果</u>もあり、<u>協同活動の成功による達成感</u>が得られ、<u>高齢者の自己肯定感の高まり</u>が感じられた。</p> <p>「おひさまの会」の参加者は、<u>新しいことに取り組む意欲のある精神的な若さ</u>を保った人が多く、<u>保育所との交流では楽しさによる交流活動の継続</u>がされてきたが、<u>会自体の活動では、サポーターの高齢化による活動の維持の難しさ</u>も今後発生してくるだろう。</p>	<p><u>世代間交流の効果</u>としては、<u>生命力あふれる子どもとのふれあい</u>が得られること、<u>子どもとの協同活動による一体感</u>が得られることが挙げられる。<u>遊びがいと</u>いう観点からは、<u>例年のコマづくりの方が良さ</u>を感じるが、<u>今回、子どもたちがお手玉遊びの経験</u>をする様子を見ると、<u>お手玉も楽しさを生む遊び</u>だと思う。</p> <p><u>お手玉の遊びやすさ・活動の楽しさ</u>には、<u>お手玉の音のよさ・お手玉の手なじみのよさ</u>に加えて<u>歌うことによる遊びやすさ・音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさ</u>がある。</p> <p>子どもは<u>お手玉の感触</u>と<u>お手玉の音</u>で中身をあてる活動を楽しんでいたが、<u>サポーター以外の高齢者は、加齢による他者への配慮の低下</u>で正解をすぐ答えてしまうかもしれないので、<u>子どもだけの活動の設定</u>で良かったと思う。<u>お手玉回しは意外と難しく</u>、<u>子どもには挑戦意欲を刺激する適度に難しい活動</u>だった。</p> <p>時代による<u>遊びの種類の変化</u>があるので、<u>高齢者になじみのある遊び</u>であるが、<u>伝承遊びの経験</u>は子どもには少ないのではないか。一言に<u>伝承遊び</u>と言っても<u>遊びのバリエーション</u>があり、また、<u>高齢者であっても伝承遊びの経験の差</u>がある。遊びの種類によって<u>子どもによる興味関心の差</u>があるのと同様に、<u>加齢による運動技能の低下</u>と相まって、<u>高齢者の活動意欲の差</u>もある。</p> <p>今後、<u>安全性の確保に留意の上</u>、<u>お手玉の製作に関わる支援</u>をする可能性はある。</p>

3.2 ストーリーラインから得られた理論記述

4名のストーリーラインから得た理論記述を以下の4点に整理した。

(1) 世代間交流について

- ・高齢住民が多い地域性は、祖父母との関わりに加えて、日常生活での地域の高齢者との関わりを生みやすい。
- ・保育所等に通う子どもは、年数回の行事という形での継続的な世代間交流の経験を持っている。
- ・様々な人とふれる世代間交流は、子どもの育ちの場である。
- ・高齢者との協同活動では、遊びの広がりだけではなく、高齢者の反応によって促される子どもの自発的関わりから思いやりの心を育てることが期待できる。
- ・高齢者に受容的に遇されることにより、子どもの自己肯定感の高まりの可能性がある。
- ・高齢者にとっては、生命力あふれる子どもとのふれあいによる子どもと高齢者の相互作用が起こり、協同活動による一体感・協同活動の成功による達成感を味わえ、高齢者の自己肯定感の高まりが期待できる。
- ・高齢者の会が継続的な世代間交流を行う場合、世代間交流の頻度は、年1回が適切である。今後、サポーターの高齢化による活動の維持の難しさの顕在化が予測される。

(2) お手玉遊びについて

- ・幼児は、保育において「わらべうた」「あやとり」「おりがみ」「コマ」など、伝承遊びの経験がある。
- ・お手玉の遊びやすさには、お手玉の音のよさ・お手玉の手なじみのよさもある。
- ・お手玉を触って中身を当てるグループ活動は特に子どもの高い興味関心を生む遊びである。子ども同士の話し合い伝え合う姿がみられ、遊びにおける子ども同士の関わりを生みやすい。
- ・お手玉遊びは、幼児から高齢者まで幅広い年代で楽しめる遊びであり、一緒に活動することで他者とのふれあいを促す遊びである。
- ・お手玉遊びのバリエーションを生かして子どもの挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊びを設定することが可能であり、子どもの発達に応じた遊びとなる。

- ・楽しむための適切なグループサイズがある。
- ・時代による遊びの種類の変化があり、また高齢者であっても伝承遊びの経験の差があるが、一般的にはお手玉遊びは高齢者になじみのある遊びであり、遊びによって想起される懐かしい思い出がある。
- ・加齢による技能の低下・加齢による他者への配慮の低下は不可避であるが、お手玉遊びのバリエーションを生かして高齢者の身体状況に適した活動が設定可能であり、高齢者の挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊び、高齢者の高い興味関心を生む活動になりうる。
- ・お手玉は、食材に見立てておまごとで用いる等様々な遊び方が可能で、子どもの創造性を促す遊びである。
- ・子どもの自発的な遊びを促す環境設定により、お手玉遊びの楽しさによる遊びの継続が起こりうる。

(3) 歌いながら遊ぶことについて

- ・子どもが意欲的に取り組む歌唱活動は、歌による心の解放や、歌による他者とのふれあいも可能である。
- ・わらべうたによるリズム遊びは、わらべうた遊びのバリエーションの豊かさで様々な遊び方が可能であり、他者とのふれあいを促す遊びである。
- ・わらべうたは親しみのある曲種であり、楽しさをもたらす曲調をもつ。
- ・ゆったりしたテンポやリズム、生活に根ざした歌詞などによるわらべうたの素朴な曲調は、大人には懐かしく、子どもには新鮮な経験である。
- ・歌うことによって遊びに集中できるという歌うことによる遊びやすさがある。
- ・音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさがある。

(4) 交流活動でお手玉を活用することにおける課題

- ・お手玉の安全性の確保・衛生管理とともに、お手玉製作に関わる地域からの支援の必要性がある。
- ・高齢者の会でお手玉の製作に関わる支援を行える可能性はある。

4. 考察

4.1 試行プログラムの有効性について

インタビューから得られた、「高齢者に受容的に

遇されることにより、子どもの自己肯定感の高まりの可能性がある。」「高齢者にとっては、生命力あふれる子どもとのふれあいによる子どもと高齢者の相互作用が起これ、協同活動による一体感・協同活動の成功による達成感を味わえ、高齢者の自己肯定感の高まりが期待できる。」という理論記述から、本試行プログラムは、幼児と高齢者の双方にとって有効であることが示唆された。

また、「お手玉遊びは、幼児から高齢者まで幅広い年代で楽しめる遊びであり、一緒に活動することで他者とのふれあいを促す遊びである」、「お手玉遊びのバリエーションを生かして子どもの挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊びを設定することが可能である、「お手玉遊びは高齢者になじみのある遊びであり、遊びによって想起される懐かしい思い出がある。」、「お手玉遊びのバリエーションを生かして高齢者の身体状況に適した活動が設定可能であり、高齢者の挑戦意欲を刺激する適度に難しい遊び、高齢者の高い興味関心を生む活動になりうる。」という理論記述から、幼児と高齢者の活動でお手玉を用いることは有効であると考えられる。

以下に、試行した各活動の有効性について検討する。

A. お手玉の中身あてクイズ

特に幼児の興味関心を喚起する活動である。手ざわりや音によって内容物を推測することは、触覚・聴覚を活発に働かせることを促す。グループ活動として行ったことで、幼児同士で相談する等の活発な関わりを生むことができた。この活動は、幼児のお手玉への関心を高める導入の活動として有効であると考えられる。

B. ウォーミングアップ

お手玉は多くの場合手作りであるため、大きさ・重さがまちまちであり、適切な力の入れ具合が異なる。活動で用いるお手玉に馴染むためにウォーミングアップの活動があるとよいだろう。

本試行では実施しなかったが、頭にお手玉をのせてお辞儀をし、落ちてくるお手玉を手を受ける活動もある。自分の頭頂部から落下する物体を手を受けるためにはどこに手を出せばよいのか、自分の身体の各部位の距離感覚をつかむために有効な活動である。お辞儀の動作を含むため、他者との挨拶として

活動を設定できるので、場の雰囲気をややかにする効果も期待できる。

また、参加高齢者が比較的若く、より運動量が期待できる場合には、頭にお手玉をのせて落とさないようにするリレーなども楽しい活動になりうるだろう。

ウォーミングアップとして様々な活動を準備しておき、参加者の身体状況や反応を見ながら活動を選択することが有効だと考えられる。

C. 高齢者による手技披露

お手玉の手技には様々な難易度があるものの、幼児の手指の運動機能の発達を考慮すると、本格的な手技を行うのは困難である。幼児はできる範囲でお手玉の操作を楽しむことにとどめ、自信のある高齢者の手技を応援する形が望ましいだろう。

高齢者にとっては、幼い頃の想起、手指の運動だけでなく、他者に賞賛される機会ともなりうるため、有効な活動であると考えられる。

D. お手玉を使った遊び

(ア) 手ぬぐいを用いた《なべなべそこぬけ》

幼児と高齢者がペアで行う活動のため個別の関わりを生むのに有効であると考えられる。高齢者はイスに座り、幼児が立って向かい合うと手ぬぐいの高さも適切で、高齢者にとっても体力的に無理がない。高齢者のリードによって課題が達成されることで、高齢者の自己肯定感の高まりが期待できる。

また、手ぬぐいの縦の長さの距離が二人の間に確保されるので、過剰な身体接触は発生しない。楽しむための交流活動で怪我等の不測の事態を避けるためにも、また感染症等の危険を避けるためにも、参加者同士の適切な距離感を保つ配慮は重要であろう。

(イ) お手玉回し

「お手玉回し」は、大学生を対象に授業で実施した際にも、どこかでお手玉が滞り、歌が終わったときに手元にお手玉がない人がいる状況が発生していることから、意外に難易度は高い。しかし、サポーターのインタビューで「全員で、一つになって遊べたのがよかった」という発言が得られており、ペアの活動だけではなく、交流活動の一体感を感じるために全体での活動を行うことは有効であったと考えられる。

「楽しむための適切なグループサイズがある。」という理論記述が得られたように、高齢者と幼児が全体と一緒に活動する際には、小グループでの成功経験を踏まえてから全体での活動に移行する等の工夫が必要だと考えられる。

4.2 音楽を伴うことによる効果について

理論記述で得られたように、まず、「歌うことによって遊びに集中できるという歌うことによる遊びやすさがある。」

また、歌うのが「親しみのある曲種」で「楽しさをもたらす曲調をもつ」わらべうたであることによる効果があると考えられる。「ゆったりしたテンポやリズム、生活に根ざした歌詞などによるわらべうたの素朴な曲調は、大人には懐かしく、子どもには新鮮な経験であり、「歌による心の解放や、歌による他者とのふれあいも可能である」。

しかし、協同活動を行う際に音楽が効果的である最も根本的な理由は、「音楽の拍・リズムに合わせることによる遊びやすさ」にある。音楽の拍・リズムに合わせることにより、運動の統御や他者の動作との同期が容易になる。安定した拍の進行は見通しを持たせ、安心して動作に集中することができる。

幼児と高齢者との交流活動においてお手玉遊びを行う際に、音楽を伴う活動であることはその効果を高める、と言えよう。

5. まとめと今度の課題

5.1 まとめ

幼児と高齢者の交流プログラムの開発を企図し、試行した音楽を伴ったお手玉遊びによる本活動は、次の3点から有効性が示唆された。①幼児と高齢者の協同活動によって、両者とも自己肯定感が高まった。②お手玉遊びは他者とのふれあいを促し、参加者の発達や身体状況に適した難易度の活動を設定しやすい。③音楽・歌を伴うことで楽しさが高まり、拍・リズムに合わせることで協同活動がしやすくなる。

また、試行した活動の、

- A. 導入活動
- B. ウォーミングアップ
- C. 高齢者による手技披露

D. お手玉を使った遊び

- (ア) ペア活動
- (イ) 全体活動

という構成はプログラムの一般化の際に有効であると考えられる。

5.2 今後の課題

本試行を交流プログラムとして一般化するための課題を考察する。

今回の試行プログラムは、すべての「幼児」「高齢者」に適応可能なわけではない。今回参加した幼児は年長児だった。お手玉の操作を子どもの発達段階から考えると、年少・年中児にはお手玉を用いた活動は難しいだろう。高齢者も、幼児との会話を楽しめ、姿勢が保つことができる程度の精神的・身体的条件がある。さらに、実施の際には、参加人数、場所の広さ等によって、適した活動は異なる。

特に重要なのは、具体的な参加者の状況に適した難易度の活動の設定である。「おひさまの会」の高齢者とは、昨年度から活動を重ねていたため、それぞれの参加者の反応を予想することは比較的容易だったが、年長児とは初対面だったため反応を予測しきれない部分があった。事前に参加者の状況を把握するための打ち合わせや、お手玉に慣れるための予備的な活動を行っておくことが望ましい。

また、お手玉遊びを保育現場で活用するためには、「お手玉の安全性の確保・衛生管理とともに、お手玉製作に関わる地域からの支援の必要性がある。」多忙な保育者が自身でお手玉を製作することは難しい。本論冒頭で述べた本学ブランディング事業「少子・超高齢化社会における活力あるコミュニティの形成研究」においては、手作り玩具製作による地域の高齢者団体と保育所の連携の事例を報告している¹²⁾。本研究においても「高齢者の会でお手玉の製作に関わる支援を行える可能性はある」ことが示された。今後、地域の活力を高める一助としても、保育所と高齢者団体の連携がさらに広がることが期待される。

謝辞

本研究にご協力頂いた高齢者の会と保育所の皆様に深く御礼申し上げます。また、日本のお手玉の会

(東京支部)の今野雅子様には、お手玉を用いた活動例を御教示頂きました。誠にありがとうございました。

文献

- 1) 文部科学省. 幼稚園教育要領. フレーベル館. 2017. p. 16.
『保育所保育指針』においては、「3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」「イ 人間関係 (イ) 内容 ⑬」に同一の文言がある。
厚生労働省. 保育所保育指針. フレーベル館. 2017. p. 25.
- 2) 上村眞生, 岡花祈一郎, 若林紀乃, 松井剛太, 七木田敦. 世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究. 幼年教育研究年報 第29巻. 2007. pp. 65-71.
- 3) 關戸啓子. 全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査. 川崎医療福祉学会誌 第15巻第2号. 2006. pp. 655 - 663.
- 4) 角間陽子, 石崎恭子. 子どもと高齢者の世代間交流における実態と課題—「高齢者の保育補助事業」を中心に—. 一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集 第60回大会. 2008. p. 281.
- 5) 保育用語辞典 (第3版) 「伝承遊び」の項 (執筆 野尻裕子). ミネルヴァ書房. 2004. p. 66
- 6) 日本のお手玉の会 (監修). やってみよう! むかしのあそび7 お手玉. ポプラ社. 2016.
- 7) 森下恵子, 山下美佐子, 橋本恵子. たのしいお手玉. 溪水社. 2005.
- 8) 同書, p. i.
- 9) 大藏倫博. 楽しくて笑顔あふれる介護予防エクササイズ: スクエアステップとスポーツお手玉の紹介. 体力科学 第64巻第1号. 2015. pp. 108-109.
- 10) 文部科学省. 幼稚園教育要領. フレーベル館. 2017. p. 18 および p. 19.
『保育所保育指針』においては、「3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容」「ウ 環境 (イ) 内容 ⑥」および「(ウ) 内容の取扱い ④」に同一の文言がある。
厚生労働省. 保育所保育指針. フレーベル館. 2017. p. 26 および p. 27.
- 11) 大谷尚. 質的研究の考え方. 名古屋大学出版会. 2019. p. 271.
- 12) 實川慎子, 栗原ひとみ. 地域の高齢者団体と保育所との連携の経緯—手作り玩具製作と歌の交流を通して—. 少子・超高齢化社会における活力あるコミュニティの形成研究—保育・教育・保健医療との有機的繋がりを軸として. 高野良子, 小池和子, 栗原ひとみ, 高木夏奈子, 實川慎子, 山田千愛. 2018年度植草学園大学研究ブランディング事業研究成果第2次報告書. 2019. pp. 7-11.

Abstract

Trial of a Program to Promote Interaction Between Young Children and the Elderly Using Beanbag Play Accompanied by Music

Kanako TAKAGI^[1], Satoko NAKANO^[2], Noriko JITSUKAWA^[1]

[1] Faculty of Development and Education, Uekusa Gakuen University

[2] Faculty of Health Science, Tokoha University

A trial of a program to promote interaction between young children and elderly individuals using beanbag play accompanied by music was conducted with the aim of helping to promote community revitalization in the context of an aging society with a low birth rate. Following the trial, semi-structured interviews were conducted of two supporters each of associations of childcare workers and the elderly. The interview content was analyzed using the Steps for Coding and Theorization method. The results suggested that the program was useful, based on the following points. (1) The cooperative activity of the young children and elderly individuals increased self-esteem in both groups. (2) The beanbag play encouraged contact with others, and the difficulty of the activity was easily adjusted as appropriate to the developmental and physical status of the participants. (3) Accompaniment by music and singing increased enjoyment of the activity, and matching the beat and rhythm of music facilitated the cooperative activity.

When implementing such programs in the future, (1) it will be important to specify an activity appropriate for the participants and (2) it would be advisable to hold a preliminary activity to familiarize the participants with beanbag play. Moreover, attention should be drawn to beanbag safety and hygiene management and assistance should be provided in making beanbags so that the children engage in beanbag play after the activity.

Keywords: beanbag play, music, young children, elderly individuals, program to promote interaction